【書評】

チェル・ノールストッケ著（橋本昭夫訳）

人間、このかけがえのないもの —ディアコニアの基礎と実践—
（Ｂ６判 １４１頁 １２６０円 いのちのことば社 ２００４年）

佐栄 文男
聖隷クリストファー大学

Kjell Nordstokke, *Det Dyrebare Mennesket*,
（Ningen, Kono Kagegai no nai Mono—Diakonia no Kiso to Jissen, tr.by Akio Hashimoto）

Fumio SAYANGI
Seirei Christopher College
本書では「社会福祉」なる言葉は一度も用いられない。しかし本書が扱うテーマはキリスト教社会福祉の理念である。あるいは社会福祉のキリスト教的理念と言っても良い。「訳者のあとがき」によれば、著者チュール・ノールストラーケは神学者で、ノルウェー福祉大学の学長の職にあると言う。ノルウェー伝道会の宣教師としてブラジルに派遣されたほか、（序文によれば、10頁）南アフリカで働いた経験ももっておられるという。社会福祉はキリスト教よる聖書と深いつながりがある。しかし、両者の関係を明らかにするのは非常に難しい。著者はこれら二つの領域に専門的にかかわっておられるので、キリスト教社会福祉の理念を論じるには適任であると言わなければならない。

著者は「日本語版への序言」で、「本書はノルウェーの事情を反映している」から「日本の読者が本書からどのような益をうけるか自分から知らないと言う（5頁）。たしかにノルウェーの教会と日本の教会とは、社会福祉に対する取り組み方において非常に違っている。著者の属するノルウェー国教会は「ノルウェー国教会におけるディアコニア計画」（30頁、他）を持ち、「個々の教会におけるディアコニアの働きが順調に発展している」（78頁）という。翻って、日本の教会はどうであろうか。日本の教会が社会福祉について深い理解を持ったことはほとんどない。しかし日本のキリスト者は社会福祉の各方面で先駆的働きをしてきた。キリスト者は日本社会において絶対の少数派であったのに、日本の社会福祉の先駆けとなり、注目すべき足跡を残している。しかし、今日のキリスト教社会福祉が危機的状況にあることは多くの論者が指摘するところである。

日本とノルウェーでは、教会の置かれた状況がまったく異なっているにも関わらず、日本の教
うなものであるかがテーマとなる」(68頁)。つまり第一の部分で明らかにされたディアコーニアを支える教会の機構、姿勢などが論じられる。

第一の部分の冒頭で「キリスト者とは何か、何をするか」が問われる（14頁）。著者の結論は「キリスト者とはディーコン・ディーコネスであり、仕える者である」ということになる。

洗礼が万民祭司職への任職であると言が言われるのと同じように、同時に来た万民「奉仕（ディアコーニア）職」への任職と言うことができよう」とある（35頁）。さらに教会とは何かという問いにも同じように答えられる。「ディアコーニアは教会の本質の基本部分を構成する」とされる（30頁）。「ディアコーニアとしての教会」という表現も用いられる（41～55頁）。「ディアコーニアの次元を拾象した教会理解は、決して思われているほどルーテル教会的ではない」とも言われる（45頁）。さらにはまたイエス・キリストが「ディーコンの原型」とされる（56～66頁）。

このような理解から、「ディアコーニアは、一般的な意味での倫理的義務ではなく、新しいのかに生かされている共同体に属するものという事実に根拠を持つ霊的な教義である」とされる（25頁）。それぞれの主張について、聖書から豊富な引証がなされる。ここだけでなく、本書の全篇にわたって、聖書から堅固な引証がなされている。

そのために本書が聖書的教義に求められるの強い説得力を持つことになっている。

以上のように、キリスト、教会、イエス・キリストが「仕える者」をキーウードとして捉えられる。

そこで次に、仕えられるのは誰か。「ディアコーニアを理解する上での重要点は、苦しみの中にいる人は助けられなければならない」ということである」(33頁)。それは「神の眼には、一人ひとりそれぞれ高価で尊い」という人間理解があるからである（8頁）。ノルウェー教会の公式の理解によれば、「ディアコーニアとは、教会が行う隣人への配慮であり、共同体を建て上げる働きであって、その奉仕は困窮の中にある人々のために特別の方法でなされる」と言う（30頁）。

この定義の中にある「困窮の中にある人々」すべてが「神の眼には高価で尊い」存在であり、隣人によって「仕えられる」べき対象である。

「すべての人々、人としての尊厳を保ち、意味豊かな人生を生きるために必要なものを提供することである。人間の生のどの側面もディアコーニアの課題であり、その働きの対象である」(32頁)。

では「困窮の中にいる人々」はどこにいるのか。著者は「ディアコーニアを、教会的ディアコーニア、施設的ディアコーニア、国際的ディアコーニアの三つの形態に分類する（36頁、68～82頁）。それによって「困窮の中にいる人々」のいる場が網羅される。そして、「ディアコーニア的実践の主軸となるのは「困窮の中にいる人々」への「訪問」と「もてなし」である（96～105頁）。これら二種類の働きを、教会的ディアコーニアにおいては、一般的に教会と教会員が行う。これは「一般的ディアコーニア」と呼ばれる。その目的は主として「予防的性格のもの」である（30頁）。しかし専門職と専門的施設によらないに対応できないケースがある。そのために施設的ディアコーニアがあり、そこでは専門的訓練を受けた「専門的ディアコーニア」による対応がなされる（79頁）。さらに「諸国間の貧富の差がますます広がっていく今世時代にあっては、国際的なディアコーニアがだんだん重要な課題となっている」と言う（31頁）。

さらに二つの重要な点が挙げられる。第一に、そのような助けは「単発的な行為」であってはならないと言うことである（33頁）。第二に、
「助ける側がいつも助ける側であり、助けられる側がいつも助けられるだけの立場であると理解されてはならない」（同）。「助けを受ける情報がある人」も「助ける側に回る」可能性があるのだから、その用意をさせると同時に、助けられる者も助ける側に回る用意がなければならない（同）。

日本の教会が本書からとくに学ばなければならない点はディアコニアを「教会の働き」、「教会の本質の基本的構成」、「共同体を通じて上げるための働き」としている点である。「教会はディアコニアを通して愛を見る形にする」（8頁）。そのために「ディーコン・ディー・コネス」の職位が置かれている。しかしほとんどの教会において「ディーコン」の役割は「牧師から派生する」もの、「ミニ牧師」（93頁）とされている。それに対し、著者は「教会はその本質からしてディアコニアである」という理解に立って、「ディーコン」の役割を考える（89頁）。教会の職務は「説教をし礼拝を執ることのみに限定する」のには誤りである（91頁）。そこではディアコニアの目的を福音宣教であると考え、「ディアコニアは教会の働きの付随的な一部」とされてしまう（107頁）。新約聖書はディーコンが負うべき特別の責任が何であるかを示す必要も示さない。「強く求めるのは非難のない生活を通して示されるリーダーとしての人格的資質である」（89頁）。教会の職務はただ狭い意味での伝道のためにのみあるのではないか。ことばによる宣教だけでなく、「愛の奉仕」による宣教をも含む（92頁）。しかし「教会の職務は一つであり、一つの職務のうちに多くの形の奉仕がある」（93頁）。「ディアコニア」と「福音宣教」とは対立するものではない（106頁）。 「ディアコニアは教会のボディー・ランゲージである」（109頁）。「ディアコニアは決して無言ではない。ディアコニアのわざがなされるところ、そこではなにごかが語られている」（同）。このことが理解されずに、「牧師とディーコンとの間に、次第にライバル関係が起こってきた」（90頁）。

ディアコニアが教会の職務から切り離れられた結果、ディーコン・ディー・コネスの働きの場は施設になった。そしてディアコニア施設のパートナーは教会ではなく、「国と地方公共団体」になった。「ディアコニアの働きの場として設立された病院の院長は、行政関連の福祉担当者とは定期的に接触をもっていたが、その職務に当たった間に一度も教会のトップと会ったことがないと言われる」ということになる（75頁）。著者はこのような事態が必ずしも望ましくないものだと考えない。しかし社会福祉は教会との関係を持たず、行政と関係するだけになっても良いとも考えていない。「ディアコニア施設にとって、なんらかの形で教会の機構とのより深い連係を考えるべきときではないか」という（77頁）。

これは日本の社会福祉施設にも見られる現象であり、そこから日本のキリスト教社会福祉の危機も生じているのではないか。ノルウェーでは行政側が「ディアコニアがこれまでノルウェーの保健行政の歴史の中で果たしてきた役割」および、「将来に向けて堅固な価値体系を守っていくための協力者である」と評価しているという（76～77頁）。これは日本でも言えることではないか。しかしこれからはどうなのか。

ノルウェーにおいて、教会の社会福祉事業が行政側の期待に応えて行くためには、ノルウェーの教会が社会福祉を教会のうちに正しく位置付ける必要があると著者は考えている。そして同時に「ディアコニアは教会刷新の可能性をそ
の内に秘めている」と言う（135頁）。日本の教会はまだ社会的責任を負うだけの実力がないのだから、先ず伝道（宣教）に専念し、実力を付けるべきだという議論が主流となっているのではないか。本書の著者はそう考えていない。日本の教会は「施設的ディアコニア」（社会福祉施設や病院だけでなく「キリスト教学校」も含めて）に目を向けず、働き人を送り出す努力をしてきていな。高い理想を持った個々のキリスト者によって多くの「施設的ディアコニア」が始められた。しかし現在そこで働くキリスト者の数が極端に少ない。「社会福祉」を「ディアコニア」として理解する視点が日本の教会に定着しなければならないのではないか。

本書は日本のキリスト教界において広く読まれるべきである。とくに教会や社会福祉施設、キリスト教学校の指導的責任を負っている人々の必読書であり、本書から多くの刺激を受けるべきであると思う。「日本キリスト教社会福祉学会」においても「キリスト教社会福祉の神学的基盤」を明らかにしようという努力が始まられた。本書の出版はその意味でも時宜を得たものと言え得ない。将来は、日本人神学者の手によってキリスト教社会福祉の理念が打ち出されなければならない。